根室海峡におけるニシン漁場の変遷
～ 明治期から現在に至る ～

キーワード：ニシン、漁場、目梨、羅臼、標津、野付、根室

１．はじめに

「標津でけっこうたくさん、ニシンが獲れているんだけど、調べてくれない？」

2018年４月､別海町ニシン種苗生産センター（以降、別海センターと呼びます）から電話がありました。さらに５月､「羅臼でもニシンがかなり獲れているので、標津と同じく調べて」との追加発注。

水産試験場にとって、このような地元からの情報はとても貴重です。

ところで･･･「けっこうたくさん」「かなり」って、どんな量？

別海センターから知らされた漁獲量（2018年４～５月）は、標津1,048トン、羅臼329トン。

・・・・　なに？！

近年の標津、羅臼の漁獲量としては明らかに突出していました。

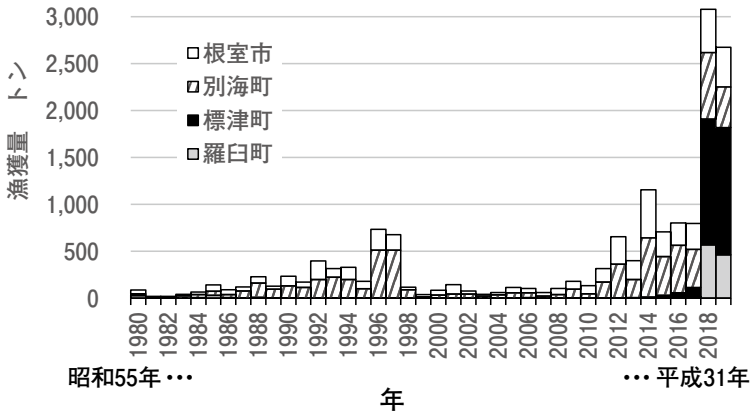


図１　根室管内におけるニシン漁獲量の推移
1980～2017年　北海道水産現勢
2018年、2019年（１～５月）水試集計速報値

1980年以降の根室管内の漁獲量を見ると（図１）、1985年から徐々に増加して1996年に700トンを超えるも、1998年には37トンにまで激減して低迷、2011年に再び増加し始めて、2014年に1,156トンとなり、2017年までは708～802トンの間で推移しました。このような変動の中心を成したのは根室市と別海町であり、標津町と羅臼町では特に顕著な増減を示すことはありませんでした。

ところが、2018年に標津町で1,342トン、羅臼町で569トンに急増したわけです。そして、翌2019年にも、１～５月の集計で、標津町で1,357トン、羅臼町で463トンの漁獲がありました。

風蓮湖ニシンの資源増大を目指して人工種苗を生産、放流する別海センターとしては、根室管内でニシンが増えることは喜ばしいこと。とはいえ、今まで獲れていなかった海域での突然の大漁、いぶかしがって当然です。

このような地元の疑問を踏まえて今回は、根室海峡に形成されてきたニシン漁場について少し、掘り下げたいと思います。

切り口となったのは、ふと目にした羅臼町広報誌「魚の城下町」に記された一文､「明治以来主要魚種の一つであったニシン」です[1)]。根室海峡の主漁場は風蓮湖と根室湾であると推定されていましたが[2)]、羅臼沖にもかつて､ニシンの大きな漁場があった、ということ・・・？

風蓮湖ニシン栽培漁業に係る試験研究に携わる著者は、人工種苗の生産、放流が始まった1980年代以降のニシン漁業しか見てきませんでした。それを反省しつつ、北水試が所蔵する古い統計資料や各地の自治体史を紐解くことにしました。

２．漁獲量の変遷

・明治20～28年、32～38年（1887～1905年、図２）

現在とは少し行政区画や名称が異なっていた時代です。当時の目梨郡は現在の羅臼町と標津町忠類、薫別、崎無意地区で、標津郡は標津町標津、伊茶仁地区、野付郡は標津町茶志骨地区と別海町で構成され､根室市は根室郡と呼ばれていました。なお、当時の漁獲統計の漁獲量の単位は「石」が用いられていましたので[3, 4]、これまでの方法に従って、１石＝0.75トンとして換算しました[5]。

明治20～28年には根室管内全域で平均3.2万トン（1.5～4.2万トン）のニシンが漁獲されていました。その中で最も多かった根室郡が平均２万トン（1.2～2.8万トン）で全体の53～75％を、次いで野付郡が平均８千トン（0.3～1.5万トン）で13～36％を占めていました。また、目梨郡では平均３千トン（0.5～７千トン、３～19％）、標津郡では平均226トン（23～441トン、２％以下）が漁獲されていました。

明治32～38年になると、根室管内の漁獲量は平均1.5万トン（1.1～2.0万トン）に半減します。根室郡では平均9.3千トン（5.2～15.2千トン）、野付郡では平均2.8千トン（1.2～4.1千トン）、標津郡では平均47トン（０～0.2千トン）と、明治20～28年の漁獲量の５～８割減となりました。しかし、目梨郡の漁獲量は平均3.2千トン（1.1～5.5千トン）で、他地域のような減少傾向は認められませんでした。

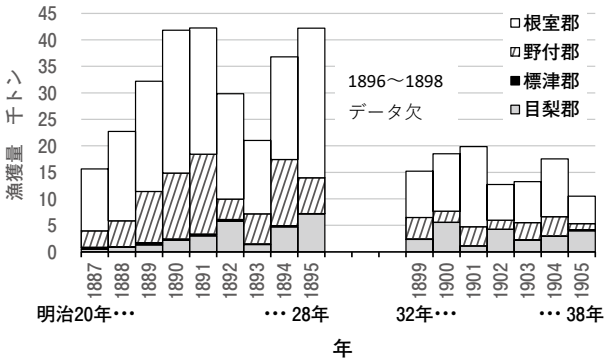


図２　明治期のニシン漁獲量の推移
北海道庁統計総覧

・大正１～５年（1912～1916年、図３）

根室管内の漁獲量は、平均4.8千トン（0.3～9.4千トン）と、さらに減少しました。

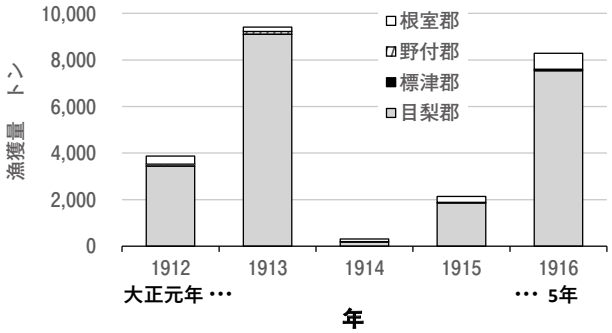


図３　大正初期のニシン漁獲量の推移
第15～19回北海道庁勧業年報

根室郡では平均316トン（113～686トン）、野付郡では平均59トン（８～128トン）、標津郡では大正５年に23トンが獲れただけでした。しかし目梨郡では、平均4.4千トン（0.2～9.1千トン）が漁獲されて根室管内の61～97％を占め、漁獲量は大きく変動しているものの、平均的には明治期よりも若干増加していました。

・昭和17～20年、27～40年（1942～1965年、図４）

大正12年に行政区画の変更があり､目梨郡であった忠類、薫別、崎無意地区と野付郡であった茶志骨地区が標津郡に編入されて現在に至ります。

根室管内の漁獲量は、昭和17～20年には平均1,680トン（1,435～2,179トン）ありましたが、昭和27～31年には1,562トンから308トンへと減少しました。その中で最も多くの漁獲があったのが羅臼町で、昭和17～20年には平均1,023トン（345～

1,669トン）と全体の61％を、昭和27～31年には平均287トン（71～777トン）と全体の47％を占め、根室海峡における漁場の中心になっていました。

減少し続けていた根室管内の漁獲量ですが、昭和32年には2,877トンにまで復活します。最も多く獲れたのは羅臼町の1,737トンで全体の64％を占め、次いで標津町の512トン19％でした。翌33年にも1,863トンが漁獲されましたが、34年に143トン、35年には17トンにまで激減し、その後、昭和59年（1984年）まで０～138トンの低水準で推移することになります。

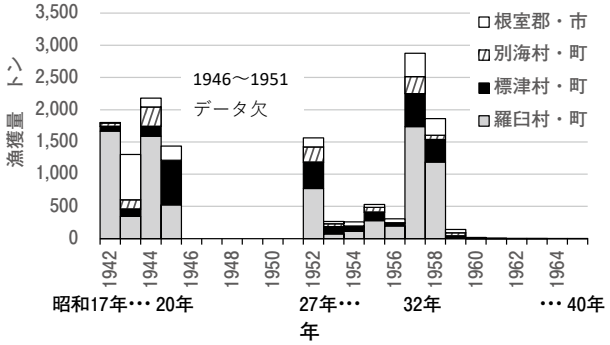


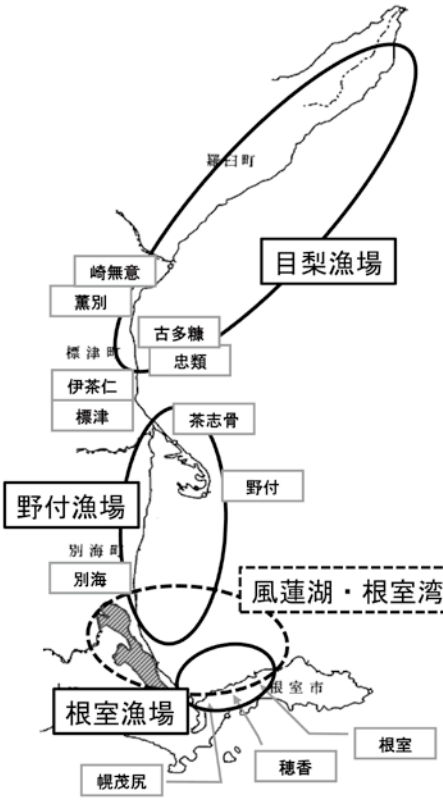
図４　昭和期前半のニシン漁獲量の推移
1942～1945年　羅臼町史、標津町史
1952～1957年　北海道漁業現勢
1958年～　　北海道水産現勢

３．漁場の変遷（図５）

ここまで見てきた各地の漁獲量の推移から、明治から平成に至る、根室海峡におけるニシン漁場の変遷を振り返りたいと思います。

明治20～28年（1887～1895年）にニシン漁が盛んだったのは、根室郡、次いで野付郡でした。根室市史[6]に「根室港付近、穂香、幌茂尻が最も豊かで、次いで、野付郡の別海、野付、茶志骨が良好な漁場であった」と記されていることから、根室港から野付半島にかけての海域が大きな漁場になっていたと推察されます。なお別海百年史[7]には「野付村の漁獲量は明治初年以前には9,000トンあった」との記述もあり、遊郭も並ぶ幻の街、キラク伝説を彷彿とさせます[8]。

明治32～38年（1899～1905年）には、根室郡と野付郡での漁獲量は減少しましたが、目梨郡では明治20～28年と同様な状況が続いて、主要漁場は根室



各漁場の各年代における年平均漁獲量(トン)

	目梨漁場	野付漁場	根室漁場
	（目梨郡）	（野付郡）	（根室郡）
明治20～28年	2,983	8,238	20,169
明治32～38年	3,185	2,814	9,317
大正1～5年	4,425	59	316
	（羅臼・標津町）	（別海町）	（根室市）
昭和17～20年	1,289	125	266
昭和27～33年	854	104	137
昭和34～59年	6	10	23
昭和60年～平成26年	3	144	104
平成27～29年	68	440	260
平成30年	1,911	705	464
平成31年	1,820	430	425

行政区画変更により、目梨漁場は羅臼町と標津町に分割
野付漁場は別海町、根室漁場は根室市の管轄となる
平成31年は、平成31年1月～令和元年5月の水試集計速報値

昭和60年以降の別海町と根室市の漁場の中心は、
風蓮湖と根室湾にあったことから、
「風蓮湖・根室湾漁場」とした

図５　根室海峡におけるニシン漁場のイメージ

郡、野付郡から目梨郡へと移り[6、9、10]、目梨漁場が根室海峡における漁場の中心である状態が、大正元年から昭和33年まで（1912～1958年）続きました。

昭和34年（1959年）から低迷していた漁獲量が増加し始めた昭和60年（1985年）以降に漁場の中心となったのは、風蓮湖と根室湾です[2]。しかし平成30年（2018年）には、風蓮湖･根室湾漁場で1,170トンが漁獲されただけではなく、標津町と羅臼町で合わせて1,911トンの漁獲があり、平成31年１月～令和元年５月（2019年１～５月）にもそれぞれの海域で855トン、1,820トンが漁獲されて、標津から羅臼にかけての沿岸に注目が集まりました。ちなみに地元漁協によれば、この時にニシンが漁獲されたのは、羅臼町では全域で、標津町では古多糠、とのことで、これらの地域は、旧目梨郡にあたります。

４．さいごに

根室海峡におけるニシン漁場は、根室～野付漁場から目梨漁場、次いで、風蓮湖・根室湾漁場へと変遷し、昨年は風蓮湖・根室湾漁場に加えて目梨漁場でもニシンがたくさん獲れました。しかし、総じて漁獲規模は減じ続け、2018年に漁獲量が増加したとはいえ、最盛期の１/10程度にすぎませんでした。

また、ニシンには数多くの集団の存在が報告されていますが（例えば小林[11]、清水ら[12]）、2018年に標津、羅臼、そして野付湾で漁獲されたニシンは、それぞれが異なる集団に属すると推察され[13]、2018年の根室海峡には３つの集団が存在していたことが示唆されました。

それぞれの海域、それぞれの時代で異なる集団が漁獲されていた可能性は十分に想像され、今回の目梨漁場における漁獲量急増も、単純なニシン漁場の復活劇ではないのかもしれません。

最後に、情報を提供していただいた羅臼、標津漁業協同組合、別海町ニシン種苗生産センター、釧路市図書館の関係者各位に深謝し、ひとまず、この話を仕舞います。

５．参考文献

１）羅臼町企画振興課企画振興係（2014）羅臼郷土史への散歩道～昭和編②～，羅臼町広報誌「魚の城下町」，No.263，2-3.
２）堀井（2004）北海道ニシン，平成15年度資源増大技術開発事業報告書魚類Aグループ，1-14.
３）北海道庁（1896）北海道庁統計総覧.
４）北海道庁（1902～1906）第15～19回北海道庁勧業年報.
５）北海道区水産研究所・北海道立水産試験場（1955）北海道春ニシン統計資料，1，1-48.
６）根室市（1968）水産，根室市史下巻，3-386.
７）別海町（1978）水産，別海町百年史，877-958.
８）別海町観光協会（2015）野付半島の伝説「幻の街キラク」（野付通行屋跡遺跡），ここまで来ると、べつせかい, http://betsukai-kanko.jp/taikenkanko /bunka/kiraku-2/.
９）標津町（1968）漁業史，標津町史，497-860.
10）羅臼町（1970）漁業のあゆみ羅臼町史，404-590.
11）小林（1993）太平洋ニシンの集団遺伝学的特性と種内文化に関する研究，遠洋水研報，30，1-77.
12）清水ら（2018）北海道周辺沿岸海域において産卵するニシンのmtDNA情報を用いた集団構造の検討，北水試研報，94，1-40.
13）堀井ら（2019）2018年に根室海峡で急増したニシンの集団判定の試み，平成31年度日本水産学会春季大会講演要旨集，5.

（堀井貴司　釧路水試調査研究部

報文番号 B2441）